

るが、先刻よりあれ程に彼の者に斬り付けると雖も、傷一ヶ所も付かず、血の出たる様子もなし、誠に不思議な奴では御座らぬか「如何にも不思議で御座る、ア、コリヤ」其方は全體、これなる者の身寄と申すが、何者である、先刻より幾度斬り付けると雖も、傷一ヶ所も付かぬと申すは實以て不思議な奴ぢやの、其方は何者ぢや「ハイ、私は、斬つても切れぬ、伏見(不死身)の兄で御座ります。

おなご(女)おんな子よりの轉訛。

木屋町を上る(北へ入る)往昔の御所が北に當るを以て京都人は北を上と云ひ南を下と謂ふ。

出養生(當時交通も不便であり且又市中にも極靜かな所が澤山あつたので遠地へ療病に行く者は少なかつた。)

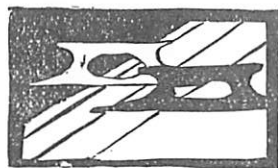
げえこ(藝妓)當時關西方面にげいごと云ふ言葉なし。げえこと云ふ者とげえしやと云ふ者あり。此區別一言には盡し難けれど一般堅氣の商人及び女達は之をげえこ又はげえこはんと呼び職人及び武士階級は之をげいしやと呼びしと思へば大過なし。げえこはげいしやに稍敬意を含ませたる言葉なり。てふず(手水)用便の事なり便所を手水場と云ひしより來りし言葉。てふず(大)シシ(小)と遣ひ分くハジカミ(芽生薑)

山猫の藝妓(東山の町藝妓)東山の藝妓と云ふ意。

ねんね(眠る)

此噺の主なる口演者

故 會呂利新左衛門	(猪里重次郎)	故三代目 桂 文枝	(橋本 龜吉)
故 桂 枝太郎	(岩本宗太郎)	故 桂 桃 太郎	(松下多三郎)
現 桂 三木助	前名手遊(松尾利雄)		



## 大津畫ぶし 大阪の氏神づくし

氏神の、首尾をみて。こよい生玉よいてがた。こゝへ高津と合圖して。顔みに北の天神を。うちに稻荷であいもせず。おゝたび(お旅)ごとに。留守つかふ。なんば男のこはけとて。八まん地獄の鬼よりも、ゑぐひ氣ぢや。御靈けんも。思ひ遣りもありもせず。氏子で居ながら、いんと云ふのは。さうしや。主をば、座摩す氣か。

三代目松鶴記